

ぬきかけをうちやりて、たらひに物の見えけるをみづから、

我ばかり物あらふ人はまたもあらじとおもへば水の玄たにも有けり

とよむを、かのこざりけるおとこのぞきて、

水そこに物やみゆらん馬さへもまめだらひをばのぞきてぞなく

〔寶藏四〕盥

湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新といへるは、其身の垢を去るごとく、心の中のけがれをも、日々に革めよとの教戒とかや、など男傾城とかやいへるもの、やうに、色まろからしめて、衣紋をたしなまんや、さりとてまた身は神明の舍る所なれば、こけ丸大臣のやうに穢にふれ、あかづける事をせんや、其わかちたゞ禮儀によつて身をきよむると、好色にひかれて容づかれるとに侍るのみ、猶我ばかり物おもふ人はまたもあらじとよめる情は、すてがたき物にして、

月の顔あらふたらひか空の海

鶏鳴告旦出幽房 手洗口漱少彷徨 想像奠星宮女恨 戀風蕭颯水洋洋

〔嬉遊笑覽方術〕手洗を夜家の中にふせ置ば、盜賊來らずと云こと、何よりいへるか、帝京景物略、不以小兒女衣置星月下曰云云、怕賊星照、亦不置洗濯餘水、爲夜遊神飲馬也といへることあり、これ不角の點の付合に、月かげも紙帳の内へよせつけず、手洗も一味すりがまじなひ、

○按ズルニ、帝京景物略卷七春場ノ條ニ、兒見流火則啐之曰、賊星夜不以小兒女衣置星月下曰、女怕花星照、兒怕賊星照、亦不置洗濯餘水、爲夜遊神飲馬也トアリ、本文云フ所ノ意ト異ナレドモ參考ノ爲此ニ附記ス、

洗

〔頭書増補訓蒙圖彙器用〕洗は古の盥洗のすて水をうくるの器也、俗にこれを飯銅といふ、